

「和解の言葉」(コリント二、五章一六〜二一節)

1 十字架と復活

先週の水曜日、三月二日から受難節に入っています。受難節はレントとも呼ばれますが、日が長くなるというのが言葉の意味です。今日は受難節第一主日、約五週間後四月一七日が今年の復活祭(イースター)です。

この間も説教は、原則として、ルカによる福音書の予定です。ただ、今日と、受難週に当たる四月一〇日、そして復活祭の一七日、この三回は、使徒書簡から聖書を選ぶことにします。早速今日は、使徒パウロの書いたコリントの信徒への手紙二が聖書箇所です。

この受難節、レントの季節、私ども教会は、イエス・キリストの受難をここに深く留めながら過ごします。

受難をここに深く留めるといえるのは、具体的にいえば、イエスの十字架の死に思いを集めるということなのです。

しかしこのことは、二千年前に起こった一つの出来事を、昔の、過ぎ去った出来事を、また考えて見る、ということではありません。それも一つのアプローチの方法ですが、それは今日の聖書のパウロの言葉を使えば、「肉に従って」(一六節)考える、思い起こすということになります。

そうではなくて、私どもが考える、思い起こすまでもなく、主イエスは、いまも私どもとともに、教会とともに、私ども一人ひとりとともにおられます。聖霊の力、また慰めとして、ともにおられます。

ですから、受難をここに深く留める、イエスの十字架の死に思いを集めるということは、いま私どもとともにいます方は、どういうお方であったのか、どういうお方として、いま私どもとともに、いますのか、そのことを、私どもが深く顧みるということなのです。

さてごく一般的な言い方でいえば、イエス・キリストの十字架の死は、私どもにとって、私どもすべての人間にとって、〈救いの出来事〉を意味していました。それが聖書のメッセージです。

しかし同じく聖書は、イエスの死が、はじめからそうした積極的なものとして受けとめられたわけではなかったことも伝えていきます。イエスの十字架に直接出会った人々、いな、イエスと行動をともにしていた弟子たちのことを、考えてみたらよいと思います。

今日は詳しく取り上げることはできませんけれども、ルカを学んできたので、その中から一つ取り上げれば、復活後の、有名なエマオ途上での弟子たちの会話に、こういう部分があります。

ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑

にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあつてから、もう今日で三日目になります（二四・一九〜二一）。

イエスの十字架の死という出来事に遭遇した弟子たちの思いが、ここに吐露されています。イエスが死んで、望みが断たれた、と言っています。イエスの十字架の死はそもそも何の意味ももっていなかった、それどころか、自分たちの希望を壊してしまったものと受けとめられたのです。

そのような十字架の死が、一転して、彼らの希望の源となったのは、あるいは十字架に目が開かれたのは、イエスが甦って、正しくいえば神によって甦らされて新しい命の担い手として現れてからです。

その場合イエスが自力で甦ったというのではありません。神によって甦らされたのです。神は御子イエスを、死の中に、死の束縛の中に放置したまわなかった。死がイエスを捕らえつづけることを許さなかった。そこには、神と死の力との戦いがあつたのです。それゆえ、復活は、死の力に対する神の勝利、決定的勝利だったので。そのことを忘れてはなりません。

「福音書はみな甦りを呼吸している」（J・A・ベンゲル）。私の好きな言葉の一つです。この季節、私ども、聖書によつて、イエス・キリストの受難、その死に思いをいたすことになりませんが、しかしどんな時も、それが、復活の息によつて満たされていることを忘れてはならないのです。イエスの復活が、その死を、救いの出来事として明らかにしたのです。

2 関係の回復

さて、イエス・キリストの十字架の死と復活、この救いの出来事を、パウロは、今日の箇所で、その意味を、「和解」という言葉を、くりかえし用いて、説き明かしています。

これらはすべて神から出ることであつて、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。つまり、神はキリストによつて世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです（一八〜一九節）。

いまお読みしたところで、はじめに確認しておきたいのは、神の和解の相手方を表す言葉として、「わたしたち」（一八節）と「世」（一九節）の二つが上げられていることです。

「わたしたち」と「世」、この二つはしかし、パウロにとつて、決して違ったものではありませんでした。私どもも、キリスト者も、まさにこの世そのものにほかならず、世に深くかかわっています。その「世」が、神の和解が受けているとすれば、ま

たそのかぎり、それは「わたしたち」も和解を受けているのだと、パウロは、そのように考えています。

さて和解という言葉が用いられている以上、そこには、暗黙のうちに、争いや対立・抗争が予想されています。

神と世、また神と私ども人間との間の争い、対立・抗争なのでしょうけれども、それは双方に同じように責任のある対立ではありません。神が私どもに咎（とが）を負っているというのではありません。どうしてそういうことがあるでしょうか。そうではなくて人間が、罪人であり、神を神としてあがめず、不信心であり、敵対しているのです（ローマー・一八以下）。争い、対立・抗争は、そこから生じているものなのです。

それが、想定される関係だとすれば、その関係は、もともとの神と人間の関係ではありません。なぜなら人間は、神によって造られた存在として、神と共に、すべての被造物を「支配する」よう託された（創世記一・二六）者として、神と相対しているからです。それがゆがんでしまった。もともとの神と人間との関係が回復されなければなりません。和解とはこの関係の「回復」のことです。たんなる仲直りと同じと考えることはできません。

関係のゆがみ、それが人間の責任だとすれば、その回復は、本来人間の側からなされなければなりません。しかし聖書は、それが神の側からなされたと語っているのです。いまお読みしたところに「これらはすべて神から出ることであつて」とある通りです。ルカによる福音書のイエスの十字架の場面で、「民衆は立つて見つめていた」（二三・三五）という言葉があります。印象深い言葉です。和解は人間の関与のもとになされたのではないのです。

神と人との和解は、神から出たものです。強いられてではありません。ご自身の自由に基づいてです。私どもは、神は愛であると知っています。永遠に愛であると知っています。愛とは、関係をつくろうという意志です。決意です。相手がどのようであるかに関わりません。嫌いでも愛することはできます。この神の愛の満ちあふれが関係の回復、和解なのです。

3 和解に仕える

申し上げてきたように、和解は、人間の企てではなく、神ご自身から出たことではありません。そして先ほど読んだところには、それは、イエス・キリストにおいてなされたのだと書いてありました。一八節には「キリストを通して」とありましたし、一九節には「キリストによって」とありました。このことが、もう少しはっきりさせられるべきです。

罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです（二二節）。

神の和解の出来事を中心に、イエス・キリストがおられます。この方なしに和解は

なされなかったのです。

人間が、罪人としての人間が、そのまま神の御前に立つことができないことはいうまでもありません。

御前に立つために、関係の回復のために、罪が清められていなければならぬ。しかし人間は自分でそうすることができるのでしようか。根本的に罪人である人間がそうすることができないのは明らかです。

パウロは、それを神が、「わたしたちのために」、「わたしたちに「代わって」（「ために」は「代わって」と訳すこともできる）、成し遂げてくださったというのです。

「罪と何のかかわりもない方」である御子イエス・キリストに、人間の罪を背負わせ、その罪の裁きをなして、罪を清めた、あがなったのです。それが十字架の死です。罪が清められ、関係の回復がなされたことを、パウロはここで「神の義を得ることができた」と書いています。

さて今日の箇所、イエス・キリストにおいて神はご自分と私どもを和解させたという事実と並んで重要なことが、もう一つあります。それは、和解のために奉仕する任務が、私どもに与えられたということ、和解の言葉が、私どもにゆだねられたということことです。

くり返し申し上げているように、神と人との和解、それは、神が、愛をその基として、神に背を向け、神なしであろうとする私どもを憐れみ、御子イエス・キリストによつて新しい関係を結び、その愛を実証してくださったということ、それを私どもがこころ深く受けとめたとき、そのようにして、神へ向けての、私どもの全面的な転換をなし遂げてくださったことを、私どもは感謝せざるをえないのです。この世の力の、いわばパートナーとして歩調を合わせてではなく、神の和解の仲間として共に生きるようにという、それは促しです。

神学者のカール・バルト（1886-1968）に『和解論』という大著があります。一九三〇年代のはじめから、六〇年代の晩年まで書き継ぎ、三千頁を優に超える大きな本です。もう少し簡単に書いてほしいと思いますが、それはともかく、その内容は、私どもが今日聖書から学んだようなイエス・キリストによる神と人との和解を書いたものです。しかしじつはそれだけではなく、一九九〇年まで続いた戦後冷戦期、核戦争の危機もはらんだ東と西の対立、自由主義陣営と社会主義陣営の対立の只中で、「和解」こそ、教会が語り伝えなければならぬことだという強い確信のもとで、書き継がれたものでもありました。

今日の聖書箇所を改めて辿れば、私ども「キリストにあつて」、「新しく創造された者」（一七節）です。「新しい被造物」です。それは、言い換えれば、和解を受けた者ということ、（一八節）。それだけではありません。和解を受けた私どもは和解に仕える務めも賜っているのです（一八節）。

神の和解を受け、和解に仕える群れ、それが教会です。教会は和解を宣べ伝えるだけでなく、和解に生きます。それがどのような形をとるのか、それはその時々私どもの課題です。しかし和解の宣べ伝えこそが教会の務めであることを、決して忘れないように、私どもは歩んでいきたいと思えます。

（三月六日）